



いずみさの昔と今 第296回

「暦と疫病の神、牛頭天王①」

牛頭天王は中世以降、播磨・摂津・和泉などで広く信仰された疫神であり、八坂神社（祇園社、京都府）の祭神です。牛頭天王は、祇園精舎（インドにおける釈迦の修行道場）を守護する神とされ、仏道修行者を守る存在であり、記紀に登場する日本神話の神ではなく異国の神、「異神」でした。インドから到来した牛頭天王の初出は延久2（1070）年、祇園社で火事があり、「天神」、「八王子」、「蛇毒鬼神・大將軍」の各像を検分した際の記録です。前回紹介した九条家文書の「五頭天王」などはこの牛頭天王や大將軍を祀る社が日根荘にも存在し、祭祀が行われていたことを示しています。牛頭天王は日本へ伝わったのち、行疫神（災難・疫病の神）として扱われました。祇園社に伝わる牛頭天王の縁起には災難を免れる方法を牛頭天王自身が提示しています。内容を要約すると「武塔天王という王の『牛頭天王』という子が后候補の波梨采女のもとへ向かう途中、巨旦将来の家に宿を取ろうとすると『貧乏』を理由に断られます。蘇民将来の家にいくと快く泊めてもらえ、天王は御礼に『牛王』を授けました。后になかった巨旦の一族を滅ぼしませんでした。巨旦の家には蘇民の娘が嫁いでいたため、天王は『茅の輪』と『蘇民将来の子孫』と書いた

札を娘の腰の帯に付けさせ、そうすれば災難から免れられると指示し、蘇民の娘のみを救いました。」というものです。この縁起にみられる災難・疫病を防ぐ蘇民将来の札は播磨・摂津・和泉などで木簡や皿、土器などに墨書されたものが見つかっています。中世には既に和泉地方でも牛頭天王を祀り、災難・疫病を防ぐという信仰が広がっていたと思われる。疫病を防ぐ神と存在し、本来は神祇官が管轄していました。実際に和泉と紀伊、摂津と播磨の国境は、疫病を防ぐ神事が行われた場所でした。ところが11世紀頃になると同じ神事でも疫病を防ぐ祭は神道から陰陽道の疫病を防ぐ祭へと変化し、陰陽師が行うようになっていきます。奇しくも前述の蘇民将来札が出土した場所は播磨・摂津・和泉が中心であり、上記の陰陽師による疫病を防ぐ祭の影響があったことは出土遺物からも明らかです。また貴族の日記「小右記」には和泉国府で陰陽師6人が藤原道長を呪詛した事件が記されており、当時の和泉には陰陽師が常在していたことがわかります。つまり、和泉地方での牛頭天王信仰の広がりは、陰陽師あるいは陰陽道知識の保有者（僧、修験者など）の影響があったこととは明らかであり、日根荘に存在した牛頭天王社はおそらくこ

うした存在と牛頭天王の繋がりが発生したものでもあったのでしよう。外来の神として日本に伝わった牛頭天王は、仏教の守護神から災難・疫病を防ぐ神として変化し、祇園社を中心とする祇園信仰へ取り込まれると同時に民間信仰としても各地へ広がりました。災難・疫病を防ぐ牛頭天王は、陰陽道へ習合され陰陽道の神となり、陰陽師の職分と関わって暦神、方位神としての性格も保有するようになります。今回は牛頭天王の方位神・暦神としての性格について紹介します。

▶「簞笥抄」（個人蔵）牛頭天王の縁起や暦・天文について記されたテキスト
（歴史館いずみさの蔵）



レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間 午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑬

～絵図編（12）「蟻通神社」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち—中世日根荘の風景—」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介し、

問合せ先 文化財保護課



「旧跡 蟻通神社跡」石碑▼
◀日根野村絵図に記された「穴通」

約700年前に描かれた日根野村荒野開発絵図の右下に「穴通」と注記された樹木列と堂宇1棟が、「蟻通神社」に該当します。蟻通神社は長滝荘に属し、長滝の総社にあたります。天正年間の豊臣秀吉の紀州攻めの兵火で一度消失しますが、慶長8（1603）年に再興され、岸和田藩主の加護を受けました。

第二次世界大戦終盤の昭和17（1942）年に旧陸軍明野飛行学校佐野分校の建設で現在の場所へ移転し、元の場所の空港連絡道路長滝交差点付近には「旧跡 蟻通神社跡」の石碑が建立されています。その多くは曳き家工法により建物をそのまま車で引っ張って1週間かけて今の場所に移動させたと言われています。



▲現在の蟻通神社

現在の蟻通神社は登録文化財となっており、舞殿で行われる「ありとほし薪能」で有名ですが、元々は平安歌人の紀貫之の「紀貫之家集」や清少納言の「枕草子」「蟻通明神説話」、世阿弥の「謡曲蟻通」などにも名前が見られる古社で、紀貫之が冠を池（冠の淵）に落とした「冠の淵」伝説が今も伝えられています。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）